様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３８１０８０

研究課題名（和文）実践コミュニティとしての保育カンファレンスのデザインに関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Design of Early Childhood Education and Care Conferences as the Community of Practice.

研究代表者
中坪　史典（Nakatsubo, Fuminori）

広島大学・教育学研究科・准教授

研究者番号：１０２５９７１５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、研究者が用いる質的アプローチ（KJ法とTEM）を援用し、保育者相互の対話を促すツールとして保育カンファレンスに用いることで、保育者の省察や子ども理解に何をもたらすのかを検討した。具体的には、質的アプローチを用いた保育カンファレンスを実施し、保育者にインタビューを行った。結果は次の通りである。（1）KJ法の使用は、多様な意見の創出、発言機会の保証、発言に対する不安軽減に寄与した。（2）TEMの使用は、多角的な子ども理解、保育中の微細行動への着目、「もしも」の場面の想像に寄与した。以上より、質的アプローチの援用は、保育者の多声的な知の交流や実践的知識の形成に有益であることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to examine what using qualitative approaches (KJ Method and TEM) in early childhood education and care conferences will bring to teachers' reflections and understanding of children. A kindergarten and a daycare teacher who participated in conferences that utilized the qualitative approaches were interviewed. The results led to two conclusions. (1) Using the KJ Method contributed to the creation of diverse opinions, guarantee of utterance opportunities, and reduction of speaking anxiety. (2) Using TEM contributed to multifaceted understanding of the children, attention to behavior, and promotion of "if" discussions. The conclusions suggest that qualitative approaches are beneficial for forming and exchanging practical content knowledge among teachers.

研究分野：幼児教育学

キーワード：実践コミュニティ　保育カンファレンス　質的アプローチ　KJ法　TEM　保育者　子ども理解　対話

１．研究開始当初の背景

保育者は、園の中で同僚と話し合い、多様な意見を交わすことで色々な気づきを得たり、保育を見る眼差しが変化したりするなど自らの成長につなげることができる。保育カンファレンスは、他者の意見を通して保育に内在する自身の問題を発見したり、自分の考えを再構築したりする重要な機会となる（平山 1995；森上 1996）。

保育カンファレンスが有効に機能するためには、本音で話し合う（森上 1996）、発言の対等性を保障する（田代 1995）など幾つかの条件が必要となる。しかし実際には、(1)若手保育者が先輩保育者の意向に沿って発言することがある（井上 2013）、(2)同僚と学び合うと言っても、実際には意見の交換や議論の進捗とは無関係に、管理職やベテラン保育者によって結論付けられてしまう（田中ら 1996）、(3)同僚と意見を交わす際、「人と違う考えだったらどうしよう‥」「私の考えを否定されたらどうしよう‥」など、保育者の中に不安やプレッシャーが生じる（濱名ら 2015）など、幾つかの困難が指摘される。

２．研究の目的

そこで本研究では、保育カンファレンスが実践コミュニティの場として有効に機能し、保育者の成長につながるための方途について検討する。園長や主任などの管理職が発言をリードするような「伝達型」の保育カンファレンスではなく、経験年数、常勤・非常勤、管理職の有無を問わず保育者が相互に対話し、全員で知恵を絞って解決するような「協働型」の保育カンファレンスを具現化するために質的アプローチに注目し、KJ 法と TEM（複線径路・等至性モデリング）の活用を試みる。これらをツールとして保育カンファレンスをデザインし、その中で個々の保育者が相互に語り合う様子や研修後のインタビューなどを通して収集したデータを分析することで、保育カンファレンスにおいて KJ 法と TEM の活用が保育者に何をもたらすのか、これらの活用を通して保育者は何をどのように語り合うのか、どのように自らの保育を振り返り、どのような子ども理解を形成するのかを明らかにする。

３．研究の方法

H 幼稚園、S 保育園を対象に、KJ 法と TEM を活用した保育カンファレンスを実施するとともに、参加した保育者の対話の様子を録音した。また、保育カンファレンス終了後、保育者を対象にインタビュー調査を行った。データはすべて逐語録化し、質的研究方法論（SCAT）（大谷 2011）に依拠して分析した。

４．研究成果

＜研究成果１＞：保育カンファレンスにおける KJ 法活用のメリットとして、次の 6 点が明らかになった。(1)同僚保育者の視点に気づく：保育者同士で付箋に記した意見や考えを出しあう作業を通して保育者は、同僚保育者の視点を知ることができる。保育者は、自分にはない新たな視点を獲得したり、同僚保育者に対する理解を深めたりすることができる。(2)想定外の子どもの姿を発見する：KJ 法を用いて対象児の情報を収集、整理することで、対象児を多角的な視点で理解することが可能になる。その子の新たな一面を発見することで、保育についての新たな見通しの獲得につながる。(3)語り合った成果を視覚的に認識する：対象児についての情報を KJ 法の分析過程でまとめるにつれて、多様な視点からの対象児理解が蓄積される。それらを視覚的に認識することで、自身の語り合いへの貢献や成果を実感することができる。(4)周りの目を気にせずに自分の考えを発言できる：KJ 法では、語り合う前に自分の考えを短い語句で付箋に記すことから保育者は、周囲に

左右されることなく自分の考えを発言することができる。(5)自分の考えが受け入れられる：KJ 法では、参加者全員の意見を組み合わせることが担保されていることから保育者は、自分の意見を否定されることなく、最後まで聞いてもらうことができる。これにより、保育者個人の受容感が高まり、肯定的に語り合う雰囲気の形成につながる。(6) 参加者全員で取り組めていることを実感する：KJ 法では、付箋 1 枚あたりに書き込める情報量が限られていることから、保育者間で情報を補うためのやりとりが生じ、このことが語り合いの促進につながる。

他方、保育カンファレンスにおける KJ 法活用のデメリットとして、次の 2 点が明らかになった。(1) 量プレッシャー：保育者は、他の保育者が記入した付箋の枚数や 1 枚の付箋に記入された情報量などを意識し、それによって焦りが生じることがある。(2) 手順プレッシャー：保育者は、KJ 法における分析手順の適切さに対する不安を感じたり、手順通りに遂行しなければならないという焦りを感じたりすることがある。

＜研究成果２＞：KJ 法を活用した保育カンファレンスにおける保育者の振る舞いや言動について、次の 4 点が明らかになった。(1) 発言しやすい雰囲気をつくる：保育者Ａ（経験年数 1 年）とＢ（経験年数 5 年）は、KJ 法を用いた保育カンファレンスの中で、発言のしやすさ、質問のしやすさを通して〔敷居低減者〕として振る舞っていた。(2) 発言を躊躇する姿から安心して発言する姿へ：保育者Ｃ（経験年数 5 年）とＤ（経験年数 16 年）は、KJ 法の特徴である付箋に記して提示することに不安を感じていたため、よりよい意見を述べて自身を守ろうとする〔自己防衛者〕としての姿が見られた。しかし、その後は自身の意見を述べることができる〔自己表現者〕としての姿が見られるようになった。(3) どんな発言も受け入れる：保育者Ｅ（経験年数 22 年）は、一人ひとりの発言を大切にして研修を進めているという【みんな感】を強調しており、一体感や語り合う心地よさを重視していた。また、保育者Ｆ（経験年数 34 年）は、付箋に記された個々の保育者の「一言」の大切さを伝え、そこから相互理解や「その人らしさ」の理解に努めていた。保育カンファレンスにおける彼女らの振る舞いや言動は、研修に参加している「みんな」を意識することや、他の保育者の気持ちを感じ取り、それを受け止めるということを意識的に発信していた。

＜研究成果３＞：TEM を活用した保育カンファレンスにおいて、次の 4 点のような保育者の子ども理解が促された。(1) 微細な行動への注目：H 幼稚園の保育カンファレンスでは、映像中の A 子の行動を付箋に書き出して出来事の順（時系列）に並べる作業を行う。これにより、映像の始めから（砂場に戻るという）ゴールまでの A 子の行動のプロセスが可視化される。この作業の中では、子どもと日常接するときよりも細かい単位の行動に保育者の注目が集まった。(2) 2 種類の情報源による子ども理解：保育カンファレンスの中で担任保育者は、A 子の日頃の様子や日々培った A 子に関する情報など「手持ちの情報源」が子ども（A 子）理解のもとになっていた。他方、担任以外の他の保育者は、A 子に関するそうした「手持ちの情報源」を必ずしも有していないことから、保育カンファレンスの中で提示された情報のみでA子の言動を解釈しようとしていた。これらが相互補完的に用いられ、A 子をよく知る保育者とそれほどでもない保育者が協働で互いの子ども（A 子）理解を豊かにしていた。(3)対象児以外の子ども理解：保育者 F は、A 子の遊びの成立条件を考えるうちに、周りの子どもが団子作りを尊重していたのかもしれないと

いう理解へと、子ども理解の範囲が広がった。また、保育者 H は、A 子にはよく応対しているが、そうでない子どもの存在にも気づいたというように、A 子の姿との対比で子ども理解の範囲が広がっていた。(4) 「もしも」による子ども理解の多角化:「もしも」という切り口から、周囲の出来事の影響をより丁寧に考慮したり、保育者の行動まで想像が及んだりするなど、A 子をめぐる多角的な視点からの子ども理解が促された。

＜研究成果４＞: TEM を活用した保育カンファレンスにおいて、保育者が行う「もしも」の検討作業が、彼女らの子ども理解にどのような影響をもたらしているのかが明らかになった。(1) 「もしも」がもたらす新たな見方 : 対象児やそれにかかわる他者が取り得た実際とは異なる言動や、事例に対する異なる解釈の可能性を「もしも」と称して検討することで、対象児や事例に対する新たな見方を広げたり、想像を膨らませたりなど、活発な語り合いが見出された。(2) 「もしも」によって派生する多様なプロセス : 保育者 X によって提示された可能性に保育者 Y が自身の想像を重ね、さらに、保育者 X がそれに便乗して語りを続けていくことで、１つの点でしかなかった想像が豊かな「もしも」のプロセスとしてつながっていった。こうした＜プロセスの派生＞は、対象児や事例に対する視点の多角化と捉えることができ、意識的に「もしも」を語り合うことが、可能性の領域をも含んださまざまな視点の発生と交流をもたらす装置として機能していた。(3) 「もしも」によって深まる子ども・場面への理解 : 語り合いの中で複数のプロセスや解釈が生じてくると、広がった想像や解釈を検証し、対象児や事例に対するより妥当な理解を得ようとする反対方向の動きが起こってくる。そのようにして生じた語り合いには、 (a) 複数の可能性を比較し、より対象児の性格や実際の状況に照らして妥当と考えられるプロセスを採用する語り合い、(b) 「もしも」をきっかけとして、実際のプロセスが選択された理由や背景が深まる語り合いの 2 種類がみられた。

＜研究成果５＞ : 上記の研究成果を踏まえ、KJ 法や TEM を活用した保育カンファレンスは、(1) 多様な意見を認め合い、(2) 安心感の高まり、(3) 個別・具体的な事例をもとにした語り合い、(4) 感情交流を基盤に語り合い、(5) コミュニケーションの促進などが可能となることから、保育者にとって実践コミュニティの場として機能することが見出された。

他方、KJ 法や TEM を活用した保育カンファレンスの留意点として、次の点が見出された。(1)どのようなテーマ設定で実施するかである。「はじめから結論をだそう」とするテーマでは、保育者の考えを制約することになり、自由な発想の考えが出にくい。また、直感的に感じたことを出しにくいテーマだと、日頃の保育実践から感じていることを付箋に記入する気楽さはなく深く考え込まなくてはならない。そのため「決められた結論ありきではなく、様々な結論の可能性が考えられるテーマであること」「深く考える必要がなく、日常の実践から考えが思いつきやすいテーマでやること」をテーマとすることが重要となる。

(2) KJ 法を用いることで保育者に新たなプレッシャーが生じてしまい、保育者の行動が制約される場合が考えらる。そのためあらかじめ決まった量の付箋を渡したり、テーマに関して気づくことがあれば付箋に考えを記入すればよいなど、できるだけ制約のかからない教示をしたりルールを定めていくことが良いだろう。

(3) 限られた時間、人員のなかで、どのように保育カンファレンスを行うかである。保

育カンファレンスの新たな方法を提案する趣旨の研究では、研究者がファシリテーターやコーディネーターとして、準備や進行の大部分を担当するという方法が採られてきた。しかし実際には、保育カンファレンスを定期的に実施している園自体が少ない現状が示すように、日々の保育と並行して「協働型」の保育カンファレンスを自律的に行うことは、そう簡単なことではない。特に、TEM を活用する場合、映像事例を作成するための撮影や編集、大量の付箋の準備のうえに、緻密な分析を要する。そのため、そうした時間や労力をいかに捻出するか、もしくは、いかに園の現状にフィットするかたちで改良できるかを考えることも必要となる。実践コミュニティの中で保育者が育ち合うためには、無理なく楽しく取り組めることは、とても重要な問題となる。

（4）現実的な課題や長期的な実践・研究計画との関係をいかに調整するかである。TEM を検討事例に用いる利点として、実際に起きたことに留まらず子どもの可能性を追求できることや、ごく日常的な事例に潜む子どもの特性や物事の複雑な関係性を明らかにできることがあげられる。しかし、実際の保育現場においては、緊急を要する問題を優先的に取り上げ、具体的に解決策を導き出していかなければならない現実がある。また、実践や議論が一過性の取り組みで終わるのではなく、年間の計画や研究の成果として蓄積していくことが求められる場合もある。そうした場合では、保育者間のコミュニケーションを豊かにしたり、子ども理解の裾野を広げたりといったことを考える余裕が持てないかもしれない。もっとも、ツールにはそれぞれの特徴があるので、何もかもを TEM で解決する必要はないが、TEM を用いた成果をそうした諸課題に以下に結び付けるのかについては、検討の余地がある。

質的アプローチに着目した保育カンファレンスは、参加する保育者が積極的に作業し、子どもの新しい一面や可能性を発見したり、他者と感情を共有したりすることを心から喜びと感じる実践コミュニティの場の形成を可能にする。実際の現場への導入に当たっては、保育者が抱える負担や課題にできる限り配慮し、研修を楽しむための条件を整えるよう留意することが大切である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

１．境愛一郎・中坪史典 2017 「保育カンファレンスで複線径路・等至性モデリング（TEM）を活用することの意義と課題：若手保育者へのアンケート調査から」『宮城学院女子大学発達科学研究』 第 17 号（印刷中）査読無

２．伊勢慎・中坪史典・境愛一郎・保木井啓史・濱名潔 2016 「KJ 法を用いた園内研修において保育者はどのような振る舞いをしているのか」 『幼年教育研究年報』 第 38 巻 69-76 頁 査読無

３．保木井啓史・境愛一郎・濱名潔・中坪史典 2016「子ども理解のツールとしての複線径路・等至性モデル（TEM）の可能性」『子ども学』 第 4 号 170-189 頁 査読有

４．中坪史典 2015 「園内研修における質的アプローチの活用可能性−KJ 法と TEM に着目して−」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部（教育人間科学関連領域）』第 64 号 129-136 頁 査読無

５．濱名潔・保木井啓史・境愛一郎・中坪史典 2015 「KJ 法の活用は園内研修に何をもたらすのか-保育者が感じる語り合いの困難さとの関係から-」 『教育学研究ジャーナル』 第 17 号 21-30 頁 査読有

６．境愛一郎・中坪史典・保木井啓史・濱

名潔 2014 「「もしも」の語り合いが開く子ども理解の可能性—複線径路・等至性モデル（TEM を応用した園内研修の試み–)『広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部(教育人間科学関連領域)』 第 63 号 91-100 頁 査読無

〔学会発表〕（計 5 件）

１．境愛一郎・保木井啓史・中坪史典・濱名潔 2016 年 06 月 04 日 「KJ 法型園内研修の現状と課題—保育者向け情報誌の分析から—」日本子ども社会学会第 23 回大会，口頭発表（琉球大学）

２．濱名潔・境愛一郎・保木井啓史・中坪史典 2015 年 06 月 27 日 「KJ 法が園内研修にもたらす功罪－保育者の感じる語り合いの困難さとの関係から－」 日本子ども社会学会第 22 回大会，口頭発表 （愛知教育大学）

３．中坪史典 2015 年 05 月 16 日 「質的アプローチを活用した園内研修のデザイン－複線径路・等至性モデルに着目して－」日本教育工学会研究会，一般発表（広島大学）

４．境愛一郎・保木井啓史・濱名潔・中坪史典 2014 年 10 月 18 日 「園内研修ツールとしての複線径路・等至性モデル（TEM）の可能性と展望」日本質的心理学会第 11 回大会，ポスター発表（松山大学）

５．境愛一郎・保木井啓史・濱名潔・中坪史典 2014 年 06 月 28 日「「もしも」の語り合いが開く子ども理解の可能性–プロセスから子どもの経験を振り返る園内研修の試み–」日本子ども社会学会第 21 回大会，口頭発表（敬愛大学）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://home.hiroshima-u.ac.jp/nakatsub/

６．研究組織
(1)研究代表者
中坪 史典（NAKATSUBO FUMINORI）
広島大学・教育学研究科・准教授
研究者番号：10259715
(2)研究分担者
（ ）

研究者番号：

(3)連携研究者
（ ）

研究者番号：

(4)研究協力者
（ ）